

『不思議の国のアリス』に見るメンタライジング能力の発達

—心的現実の経験モードとリフレクティブ機能—

多田昌代*

I はじめに

『不思議の国のアリス』の物語を全く知らないという人は少ないだろう。ルイス・キャロルによって1865年に出版された児童文学であるが、大人の心をもつかむ魅力があり、今も世界中で愛読されている。150年近く愛され続けるということは、そこに普遍的真理が描かれているからであろうし、想像力をかき立てる力がある。

筆者は本論文で、この物語をアリスの自己の成長の物語として読み解き、次いで二つのことを論じたいと思っている。一つは心的現実の経験の二つのモードとその統合について、もう一つは自己の組織化に益するリフレクティブ機能 (reflective function) についてである。そして、これらの過程はメンタライジング (mentalizing) 能力の発達の過程であり、同時にコミュニケーションを学ぶと言うことでもあるということを論じるつもりである。これらの概念はFonagyと同僚によって、臨床と研究とを有機的につなぎながら展開されていて、きわめて説得的であるのだが、日本では肯定的な意見ばかりではなく、残念ながらその真価が理解されていないような印象がある。本論では、これらの概念がいかにか心的機能の発達に関する理解を豊かにしてくれるかを、筆者のできる範囲で示すことを目的としている。

いくつかの概念について説明の必要があるだろうが、ここではメンタライジングとリフレクティブ機能について少し解説し、他は論じる際に説明を加えることにする。

メンタライジングを定義すると、「個人が自分自身や他人の行動を、個人的な願望や欲求、感情、信念、論理といった志向的な心的状態を基盤に意味のあるものとして、黙示的にも明示的にも、解釈するといった心的過程である」(Bateman & Fonagy, 2004/2008)。Holms (2006) によるとこの定義には、①「考えることについて考える」と言う意味でメタ認知的現象であること、②自分自身や他者の行為の原因を理解するために使うこと、③計画、欲求、願望を持つ能力—意図を持った状態であるということ、④不変の特性ではなく(文脈依存的)、過程であり能力でありスキルであるということ、という4つの側面が含まれていると述べている。また幾多の心理療法がその優位性を主張していることに対し、「治療的変化のメカニズムをどのようなものと解しよう(略)介入の有効性は、患者が自分たちの心的状態の経験を、治療的再提示(表象)にそって考える能力に拠っている」(p. 168) と考える。このため、メンタライジング能力を高めることが目

* 京都大学カウンセリングセンター 非常勤講師

指され、メンタライジングに基づく治療が様々に実践されている。

リフレクティブ機能とメンタライジングの意味するものはかなり重複している。Fonagy(2006)は「調査研究においては愛着に関係したメンタライゼーションの量的指標を指すのにリフレクティブ機能という用語を用いてきた」と述べており、実際、成人の愛着の測定法であるAAI (Adult Attachment Interview) の尺度は今もreflective scaleと呼ばれ、リフレクティブ機能の測定をする。しかしこうした研究の考察部分ではメンタライジングを使うことも多く、互換可能な概念と考えて良いだろう。ただ、メンタライジングは心の理論と同じものを指す用語として発達心理学や自閉症研究で最近好んで用いられるが(板倉、2007, Frith、2003/2009)、リフレクティブ機能という語を用いている文献を目にしたことはない。また、リフレクティブ機能はreflectionやmirroringといった概念と近いので、思い描く際の言葉の背景は少し異なるかもしれない。reflectionやmirroringは養育者やセラピストによって子どもやクライアントに対して行われる介入であり、それが内在化されることがリフレクティブ機能の成立にとって重要なのであるが、こうした関係性、養育ということを暗黙の内に考えやすいのがリフレクティブ機能であるだろう。Fonagyら(1994)は、「リフレクティブ機能という用語の我々自身の使用は、愛着関係の組織化、発達と維持における心的状態の気づきに限定している」と述べている。「愛着関係の」という限定はメンタライジングの定義にはなく、これも相違点として挙げられよう。もちろん、メンタライジングを考える際に関係性は重要な役割を持っており、この相違点についても厳密なものではないと考えられる。

Fonagy & Target (1997) は、リフレクティブ機能という語を主として用いており、その発達の側面が強調されている。リフレクティブ機能が「自己意識、自立性、自由や責任のような自己の多くの規定的特徴と密接に関わっている」こと、その意図的スタンスという性質が、「自分自身の行動を説明し、それゆえ首尾一貫した自己構造の基盤である自己経験の連続体を作り出す」ことを挙げ、自己組織化において重要な役割を担うとしている。^{注1)}

本論はこうした視点からアリスのリフレクティブ機能の働きが、いかに彼女を前に進ませ、成長させていったかを見ていくつもりである。ではまず物語の流れに従って下地となるような筆者なりの臨床心理学的理解を提示する。翻訳は多数出ているが、本論では平易で読み易い岩波少年文庫版(2010)を使用した。(引用部分は「」で表している。)^{注2)}

II 物語の流れと心理学的理解

物語は有名な土手のシーンから始まります。退屈と暑さで眠ってしまいそうだったアリスは、ひとりごとを言いながら走っていく白ウサギを見て、「とりたててかわったことだとは思いませんでした。」しかし、白ウサギがチョッキのポケットから時計を取り出すのを見て、好奇心から追いかけて、ウサギに続いて穴に飛び込んでしまいます。しかしこのとき彼女は「出られなかったらどうしようなどは、まるっきり考えてもみませんでした。」

ここでのアリスは、チョッキを着ているという外見の奇異さには引きつけられますが、ウサギ

がしゃべると言う、より本質的に奇異である部分を自然なものと受け止めます。そして後先を考えずに衝動的に行動し、自分の思考に注意を向けることができません。

アリスは下へ下へと落ちていき、ややマニックに一人でしゃべり続けます。ここでないどこかの場面を空想して、自分がどうするか、どう思われるかの思考実験をしますが、どれもろ覚えの知識によるもので、身体も思考も地に足が着いていないという感じです。

落下が終わると、様々な方法によって身体が伸びたり縮んだりする目に遭います。小さくなるとは後悔し、大きくなるとは後悔し、とうとう泣いてしまいます。興味深いのはアリスが「一度に二人の役をするのが大好きだった」ことで、泣いている自分にむかって「泣いたって何にもならない」と厳しく言って聞かせます。そして前向きにどうしたらいいか考え始めます。

アリスはその場の感情に流されやすいですが、行動力があって自分のことを観察することもできる少女のようです。また二役になって言い聞かせている姿は、養育者の姿を取り入れているのでしょうか、複数の観点をもつということであり、メンタライジング能力の発達に重要な要素となります。

サイズの変化はアリスに自分はいったい誰なのかという疑いをもたせます。そして自分は知り合いの誰かにかわってしまったのではないかと考え始めます。現実をうまく受け止められないとき、現実を否定するか自己を否定するか、どちらかになりがちでしょう。アリスは自明であるはずの私は私であるという部分が揺らぎ、自分は惨めなメイベルであると結論づけてしまいます。ほとんど妄想のようです。そして今度は孤独のために涙します。

過剰なストレスと孤独によってこのままなら発病という状況ですが、彼女はさらにサイズが小さくなるという現実直面して、精神病的な思考から一気に脱して次の行動に移ります。自分が流してできた涙の池に落ちるといふさらなる不幸にも、自業自得だと反省します。

そこでネズミに出会ったアリスは、仲良くしたいと思って、「ウ・エ・マ・シャット？」と声をかけます。「私の猫はどこ？」という意味のフランス語だそうです。ネズミが身体を震わせるほど恐れるのを見て、ようやく自分の言ったことの愚に気づいて謝ります。しかし、その後も何度も猫の話をしてネズミを怒らせてしまいます。

そのやりとりはまるで漫才のようでこっけいなほどですが、精神分析的に『投影同一化』という観点から見られることもできるように思います。ネズミは猫や犬に対する憎しみをアリスに投げかけ、アリスは投げかけられた感情から自由になれず、空回りし続けます。そうして、犬や猫の話をし続けてしまうアリスは、動物たちからは犬や猫と同じように恐ろしい存在となり、ひとりぼっちで取り残されることとなります。

次に登場するのはチョコッキを着たあの白ウサギです。アリスは白ウサギの家で小びんの中身を飲み、悲しくなるほど大きくなってしまいます。しかし「ウサギ穴なんかにはいるんじゃないかな、って言いたくなってくるけどーけどーけど、こういうのっておもしろいことはおもしろいわね！」と言い、大きくなったら本に書こう思うほど、前向きに変化しています。

大きくなったアリスは白ウサギとその召使いたちと戦い、小さくなったアリスは子犬の突進に対して必死に防戦しました。ここでの彼女における変化は、戦略を立てるようになったと言うことでしょう。戦うためには相手の様子をうかがい、自分の能力の長所と短所を見定めて、できる範囲の戦略を考えることです。大きいアリスは皆を大声で脅し、小さいアリスは小枝に子犬をじゃれつかせ、逃げる隙を見計らいます。ネズミのしっぽばかり見ていたアリスとは大違いでしょう。

さて次に出会ったのはキノコの上のアオムシでした。アオムシは問います、「だれだ、お前は？」。上述のようにアリスは私は私であるという自明であることが揺らいでいるので、この問いにうまく答えることができません。「けさ起きたときだれだったかってことならわかるんですけど、それから何回かかわっちゃったみたいで……」と言ってアオムシに「わからん」を連発されます。彼女は何とかアオムシに共感してもらおうと言い方を工夫しますが、言下に否定されます。彼女があきらめて去ろうとすると、今度はアオムシが彼女を引き留めます。それでもなかなか話し出さないアオムシに対し、アリスは今までにない忍耐を見せ、ついにキノコの秘密を教えてもらいます。セルフ・コントロールがずいぶんうまくなっていると言えるでしょう。アオムシが沈黙がちで必要以上にあおることがなく、彼女の情緒に対し言わば下方修正的であったことが、情動制御を容易にした面もあるでしょうし、沈黙が考える時間を与えるという点も重要だったでしょう。とにかく彼女は自分のサイズの変化をコントロールすることができるようになったのです。

次の舞台は公爵夫人の家でした。やっかいな人たちがどんどん出てきますが、特に興味深い存在なのはにやにや笑うチェシャー・ネコでしょう。彼とだけ（と言っていいと思いますが）、会話が意味を持って成立します。アリスが「ここからいったいどっちへ行けばいいか、教えてくれない？」と言うと「そりゃ、どこへ行きたいかってこと次第だね」とネコは言います。本当にその通りです。同じような会話を続けた後、アリスは質問の仕方を変えることによって行き先の情報を得ることができます。そしてネコはここにいる人はみんな気がへんで、アリスも気がへんだからここにいるのだと話しますが、アリスは心の中で「そんなことでは何の証拠にもならない」と思います。自分は惨めなメイベルだと考えた少女とは別人のように、自分であるという揺るがない感覚が育ってきているようです。

またチェシャー・ネコは再会を約束し、豚になった赤ん坊のことを聞くことでアリスへの関心を示し、ぱっと消えたり出たりしないで欲しいというアリスの要望を尊重します。こうした扱いをされることは、アリスにとってとても心強かったでしょう。チェシャー・ネコの登場は断片的ですが、物語の中のほっとする要素になっているように思われます。

次は、3月ウサギ、帽子屋、ヤマネとのお茶会の場面です。ここでの会話にはへんてこな理屈や言葉遊びがちりばめられ、まるでアリスにディベートの練習をさせているようです。特に帽子屋の話はチェシャー・ネコとは対照的に「ごくふつうの言葉にちがいないのに、意味が全然ないとか」思えないもので、アリスには何が何やらさっぱりわかりません。彼女がわからないと伝えても、帽子屋はますます偉そうにするだけでした。それでも食い下がるアリスは、お茶会のナ

ンセンスなルールに気づくことができます。これは自分の考え方ではなく、相手の考え方で考えることができたから気づけたのだと言えるでしょう。

その後お茶会の参加者はヤマネの話聞くことになりませんが、これもずいぶんへんでこで、アリスはいちいち質問して皆に嫌がられます。お話にきちんとした合理性を求めたいという自分の価値観を棚上げしておくことができないのです。帽子屋の話の時にはできたのですが……。結局、彼女はがまんできずに席を立ってしまいました。

次に向かうことになったのは、ハートの女王のお庭でした。そこで出会った女王は、些細なことで腹を立てて「こやつ首をはねろ！」と言うのが口癖でした。女王様も王様も権力者然として、周囲のものは皆脅えています。アリスは「なあんだ、たかがトランプ一組じゃない。こわがることなんかないわ！」と心の中で自分に言い聞かせます。

アリスは女王様のクロケーの会に参加することになります。これがまたへんでこで道具がでたらめならルールもでたらめのひどく難しいゲームでした。周りの人々が次々と死刑宣告されていく中、アリスも自分の身が心配になってきます。そんなときにチェシャー・ネコが現れます。彼女はうれしくてネコを相手に愚痴をこぼし、元気を出します。しかし今度はチェシャー・ネコの処刑をめぐって王様、女王様、処刑役がもめ始めます。そのもめ方がまたへんでこです。処刑役の主張は『首だけのネコの首をはねることはできない』、王様の主張は『首があるならはねられるはずだ』、女王様の主張は『いますぐこの問題が片付かないならこの場の全員の首をはねる』というものでした。3人はお互い相手の言うことを聞こうとせず、議論は平行線のままですが、なぜか事態の收拾をアリスに頼みます。アリスは3人のどの主張とも与しない方法で事態を打開することができました。

次にアリスは不思議な生きもの、にせ海亀とグリフォンに出会います。にせ海亀の身の上話を聞きますが、沈黙とすすり泣きの合間に話されるもので、何が悲しいのかわからない悲しい物語です。グリフォンは「ぜーんぶ、思いこみばっかしさ、あいつは。悲しいことなんざ、まるっきりありやしねえんだ。」と言っていました。鬱病の人の認知の偏りが連想されます。次に二人はダンスの話をして実際にアリスに踊って見せたりします。躁転したとでも言いたくなりますが、会話はダジャレや言葉遊びに満ち、アリスはそこでも合理的な意味を探そうとしますが、二人はお茶会のmadなメンバーほどナンセンスではなく、アリスも強く自分の正当性を主張したりはしません。

二人は彼女に彼女自身の冒険の話をするように言い、聞き入ってくれます。しかし、アリスが本当に困っていることに共感してくれるわけではなく、彼らがしきりに変だというのは暗唱がこんがらがるところでした。アリスにためしに暗唱するように言い、彼女はいやいや従いますが、出てくる言葉は自分でも何を言っているのかわからないおかしな言葉でした。アリスにとって、他人から出てくるへんでこな言葉は好奇心をそそるものでも、自分から出てくるそれは自分に対する信頼を損ない、混乱に拍車をかけるものようです。そしてさらに暗唱を要求してくる二人

に対して、断る勇気もありません。女王に対しては威勢良く主張できたのです。表面的にでも親和的にされるとかえってNoと言えないというのはよくあることかもしれません。社会心理学で言われる斉一性への『集団圧力』が働いていると考えることになるでしょうか。アリスは「裁判のはじまり、はじまり！」という声に救われます。

グリフォンに連れられ、アリスは法廷に行きます。そこでは王様女王様をはじめ、トランプ一組全部が集まり、その他多くの登場人物が集合していました。タルトを盗んだ罪でハートのジャックが被告になっています。帽子屋など関係なさそうな証人尋問が続き、裁判もすこぶるへんてこです。そしてなぜかアリスが証人として呼ばれます。

規則や推論のでたらめさをアリスは正しく指摘していきますが、正義は行われそうにありません。頭に来たアリスはついに叫んでしまいます。「あんたたちなんて、ただのトランプじゃないの！」

「そう言ったとたんに、トランプたちはいっせいに宙に舞い上がり、アリスめがけて飛びかかってきました。」トランプのカードは枯れ葉に変わり、アリスは目を覚ましてすべてが夢であったことを知ります。

アリスは姉によって、速やかに現実の世界に戻りますが、物語を聞いた姉の方はしばし物語の世界を楽しみ、大きくなった妹の姿を想像し、その妹の心の中にある不思議の国の物語について考えるところで物語は終わります。

Ⅲ 心的現実の経験のモード

Fonagyは小さな子どもの心的現実の経験のモードを、『心的等価 (psychic equivalence) モード』と『ごっこ (pretend) モード』の二つの性格を持つものとして記述した。心的等価モードとは、世界イコール心であり、心的表象はそれらが表象している外的現実から区別されないで、心的状態が現実のものと経験されることである。夢、フラッシュバック、妄想などが例としてあげられている。ごっこモードは心的状態は現実と分けられるが、現実結びつかないあるいは現実にしつかりと根ざさない状態のことである。言い換えると、心的等価モードは、内的世界と外的世界が一つであるという主観的感覚を持っているのに対し、ごっこモードは内的世界と外的世界の間に区別されていることに重要性があるのである。

この二つのモードは、子どもの心を不安にさせるものである。考えは考えに過ぎないのでなければ、すなわち考えただけでは外的現実是不変変わらないのだという安心がなければ、考えることはとても恐ろしいことだろう。また外的現実と内的世界の境界は本来とても危ういものである。お化けの絵本を楽しんだ後では、カーテンが揺れても恐ろしく感じたりする。こうした不安がこの二つのモードの統合である、リフレクティブモードあるいはメンタライジングモードへと後押しするのである (Fonagy & Target, 1996, Target & Fonagy, 1996)。そして統合へのプロセスとして、子どもが、親や年長の子どもの「心の中に表象された自分のファンタジーや考えを見、これ

を再び取り入れ、自分自身の考えたことの表象としてそれを用いる」(Fonagy & Target 1996, p. 221) が必要であるとしている。^{注3)}

アリスの物語に戻ってみよう。アリスは自分が夢を見ているとは知らず、地下の世界にいて思っている。内的世界と外的世界が地続きと思っているのであり、心的等価モードと言っていいだろう。様々な不思議でへんてこなことが起き、アリスは現実を受け止めることができずに自分はメイベルであるという妄想様の考えをもってしまう。現実を分離して考えることができないためである。

しかし次第にへんてこな世界に慣れてきたアリスは、言わば現実を対象化して捉えるようになっていく。登場人物たちとどんどんコミュニケーションしていくのだが、ほとんどの会話には意味がない。これは現実との結びつきがないからであり、ごっこモードと言えるだろう。トランプに過ぎない女王の、実際には決して行われない処刑の脅しなどは、本当にpretendでしかない。大勢で行われる共同ごっこ遊びと言えるが、アリスもしっかりクロケーに参加しないと首をはねられるのではないかと心配になる。チェシャー・ネコがみんな気がへんで、アリスも気がへんだからここにいるのだと言っているが、まさにその通りであろう。

だがアリスは証言台に立つことになって、論理的であるべき審判がとんでもなくでたらめでしかも止めることができないという状況に及び、次のように叫んでしまう。「ただのトランプじゃないの!」。これは共同ごっこ遊びをやめる号令の役割を果たす。内的現実と外的現実の二重性が壊れた瞬間であり、とても劇的である。

そして二つのモードが統合された形で表現されるのが、エピローグのような姉による想像のシーンである。原文ではpictureという動詞が使われており、外的現実の景色の上に登場人物たちの姿が重ね合わせて描かれる。外的現実の絵とは別の絵が心の中にholdされる。そうしながら姉はきわめて現実志向的であり、それらがすべて想像であることを知っている。これがメンタライジングモード(「心は多くの違ったやり方で世界を表象している」(Allen, Fonagy & Bateman, 2008, p. 169))であると言えるだろう。さらに姉は大人になって子どもたちにお話を聞かせるアリスの姿を想像し、そのお話の中に不思議の国の夢の話が含まれているシーンを思い描く。そして大人のアリスが子どもたちの悲しみや喜びを共有しながら、自らの子ども時代のことを「心によみがえらせることでしょ」という言葉で締めくくっている。メンタライジングは未来の他者(アリス)に向けられ、未来の他者の回想として過去に向けられる。心への接近可能性の自由さの点で、アリスの姉はメンタライジングのアートを心得た人である。これはすなわち作者ルイス・キャロルがそういう人だということなのだろうけれど。

IV アリスの中のリフレクティブ機能

リフレクティブ機能に自己組織化を促進する機能があることは、先述したとおりである。今度こうした観点からアリスの物語を振り返ってみよう。

白ウサギを追いかけて穴に飛び込んでしまうアリスは、外見の奇異さに引きつけられ、後先を考えず、自分の思考に注意を向けることができない。この心のあり方には意図的スタンスがなく、Fearonら（2006）がメンタライジングの失敗として挙げている「見たままの理解」（concrete understanding）のタイプと考えられる（細かいことへの過度の没頭、考えないで行動する、他）。落下しているときに繰り広げられる思考実験も現実の裏打ちのないうつろなものだが、興味深いのは彼女が決まって他者の視点を考えることである。一人で二人の役をするのが大好きで、自分の考えについて考える誰かを想定し、その誰かが考えることを考えるというのは、リフレクティブ機能の発達を促進するだろう。

この後アリスは、身体のサイズの変化という至極具体的な自己の連続性の変化による衝撃のために、自分はメイベルであるという妄想様の考えを抱いてしまう。しかし現実への対応の緊急性がこうした思考を中断させて行動へと促し、自業自得と反省するなど内省できるようになっていく。

そしてアリスは、色々な登場人物と会話していくことになる。ネズミについて、先に投影同一化という観点で説明を試みたが、これはメンタライジングでも説明可能であろう。Allen, Fonagy & Bateman（2008）は、他者の心を正確にメンタライジングするには、自分自身の観点を抑制することと他の人の観点を推測することという二つの全く異なる過程が必要であることを述べている。この時アリスに必要なのは、ネズミは猫も犬も嫌いであるから話題に出してはいけないという合理的判断を堅持し、セルフ・コントロールすることであり、相手の表情からのフィードバックを随時取り入れながら、何の話題が好ましいと感じられるかを推測することだったはずである。この後もそうだが、アリスがいかに自分自身の観点を抑制することができるかが、メンタライジングの成否の鍵となるようである。

この後のアリスは白ウサギや子犬に対して、戦略的に考える。これは明らかに意図を持ったスタンスであり、リフレクティブ機能が発達してきている証拠であろう。アオムシに対する頃にはずいぶんセルフ・コントロールがうまくなっていて、それと対応するかのよう自分のサイズの変化をもコントロールする術を得る。自己を制御できる感覚というのは自己効力感を高め、自己の組織化をますます進めるといふ、好循環ができるだろう。チェシャー・ネコとの会話のところで見たように、自分であるという感覚が揺るぎないものになりつつあるようである。

アリスは3月ウサギ、帽子屋、ヤマネ、女王様とつくづくやっかいな会話をしていく。アリスはその度に自分自身の観点を抑制し冷静になって相手の観点を推測できたり、かっとなって推測できなかつたりと、言わばメンタライジングの練習を続けていく。女王様、王様、処刑役の3人がもめていたシーンでは、3人の主張のどれとも違う方法を考え出して事態を収拾することができた。これはメンタライジングにおいて重視される現実に対する多元的な見方をもつことであり、思考がよりオープンであるという現れであるだろう。

次にせ海亀とグリフォンに会う。にせ海亀の何が悲しいのかわからない悲しい話は、感情の

同定や調節に失敗していると言うことであり、情動のメンタライジングの失敗と言えるだろう。アリスは暗唱の際に自分から出てくるおかしい言葉に混乱するが、これは自己発動性の感覚に不可欠な行為の所有の感覚をいたく傷つけられるせいであろう (Stem, 1985/1989)。自律性が弱められ、斉一性への集団圧力に負けてしまいやすくなる。集団圧力は「空気を読む」こととしてよく経験されるものであるが、多くの場合自己欺瞞が伴うと推測されるし、自己欺瞞はメンタライジング能力を弱めてしまう。(さらに言うなら集団内でのメンタライジング能力の低下は、対人間の問題解決を難しくし、集団力動を危ういものにするという悪循環が起きやすい。) アリスは早く会話を終わらせたいと思うが自分ではどうすることもできず、裁判の知らせという外的な力でようやくそこから離れることができる。

そして法廷のシーンとなる。ストーリーには私的自己から公的自己へという流れがあり、自己の組織化のストーリーとして読み解くとき、最後のシーンが法廷であるのはとても適切であるように思う。

ここでアリスはハートのジャックが不当な扱いを受けるのを止めるために王様を論駁しようとするが、正義や権利は守られなければならないというコンセンサスのないところでは、虚しい行為でしかないことがわかる。後半は集団というものについて考えさせられる展開になっていて、自己の組織化が進むと社会の中の自分に直面していかなければならないことと合致している。その後の展開は先に検討したとおりだが、夢から覚めたアリスの「なんてすてきな夢だったんだろう」という言葉からは、泣いてばかりいた少女の心の成長が感じられる。

Fonagy & Target (1997) は自己組織化を加速させる社会的過程として、ごっこ (pretence)、おしゃべり (talking)、同輩グループとの相互作用の3つを挙げている。この3つはどれもアリスの物語にふんだんに存在しており、これらが彼女の自己組織化を加速させたことは明らかであろう。とりわけやっかいな人たちのおしゃべりは、メンタライジング能力への挑戦でもあり、心というものは様々であるという感覚を育む。やっかいであることは体験にリアルさを付与するし、言葉遊びや登場人物のユーモラスさは体験に圧倒されないようにする保護要因となるだろう。外傷的な困難な状況であるのに正常な発達をすることをレジリエンス (弾力性) と言うが、アリスの物語はレジリエンスの物語と捉えることもできるかもしれない。

V 終わりに

本論において筆者は、『不思議の国のアリス』を題材として、心的経験の二つのモードとその統合、自己の組織化に益するリフレクティブ機能について論じることを試みた。Fonagyらが論文のタイトルに使っている『現実と遊ぶ』(playing with reality) ことが自己を成長させるということを経験から見てきたとも言えるだろう。大学生活は、ごっことおしゃべりと同輩との相互作用にあふれ、外的現実からはしっかりとではないにしても分離されている。自己の組織化 (成長) を考えるにはふさわしい場所であることを、今回改めて考えることができたように思う。

- 注1) Fonagyらはこの論文以前にはreflective self functionと呼んでおり、このreflective selfはWilliam Jamesから取り入れたと述べており (Fonagyら, 1994)、selfを考える際にはリフレクティブ機能の方を用いる方が、歴史的には正しいように思われる。
- 注2) アリスの世界にスムーズに入るために、次章ではアリスに倣ってやや行儀の良い調子に変えてある。
- 注3) 「母親が子どもの不安をreflectし、あるいはmirrorするとき、この知覚が子どもの経験を組織化し、その子は今や自分が感じているものが何か『知っている』」(Fonagy & Target, 1997) という表現も可能である。

文献

- Allen J G, Fonagy P & Bateman A(2008) : Mentalizing in Clinical Practice. American Psychiatric Publishing, Inc.
- Bateman A & Fonagy P (2004) : Psychotherapy for Borderline Personality Disorder : Mentalizationbased Treatment. Oxford University Press. 狩野力八郎・白波瀬丈一郎監訳(2008) : メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害 MBTが拓く精神分析的な精神療法の新たな展開 岩崎学術出版社
- Carroll L (1865) : Alice's Adventures in Wonderland. 脇 明子(訳) (2000) : 不思議の国のアリス 岩波少年文庫
- Fearon P, Target M, Sargent J, Williams L, McGregor J, Bleiberg E & Fonagy P (2006) : Short-term Mentalization and Relational Therapy (SMART) : An Integrative Family Therapy for Children and Adolescents. In Allen J. G & Fonagy P (ed.) : Handbook of Mentalization-Based Treatment. John Wiley & Sons, UK, 201-222
- Fonagy P (2006) : The Mentalization-focused Approach to Social Development. In Allen J. G & Fonagy P (ed.) : Handbook of Mentalization-Based Treatment. John Wiley & Sons, UK, 53-99
- Fonagy P & Target M (1996) : Playing With Reality : I. Theory Of Mind And The Normal Development Of Psychic Reality. International Journal of Psycho-analysis, 77 : 217-233
- Fonagy P & Target M (1997) : Attachment and reflective function : their role in self-organization. Development and Psychopathology, 9 679-700
- Fonagy P, Steele M, Steele H, Higgitt A, Target M (1994) : The Emanuel Miller Memorial Lecture 1992 The Theory and Practice of Resilience. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 35 (2) 231-257
- Frith U(2003) : Autism : Explaining the Enigma Second Edition. Blackwell Publishing. 富田真紀・清水康夫・鈴木玲子 (2009) : 新訂 自閉症の謎を解き明かす 東京書籍
- Holmes J (2006) : Mentalizing from a Psychoanalytic Perspective : What's New? In Allen J. G &

- Fonagy P(ed.): Handbook of Mentalization-Based Treatment. John Wiley & Sons, UK, 31-49
- 板倉昭二 (2007) : 心を発見する心の発達 京都大学学術出版会
- Stern D N (1985) : The Interpersonal World of the Infant. Basic Books, Inc. 小此木敬吾・丸田俊彦 (監訳) 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989) : 乳児の対人世界 理論編 岩崎学術出版社
- Target M & Fonagy P (1996) : Playing With Reality : II. The Development Of Psychic Reality From A Theoretical Perspective. International Journal of Psycho-analysis, 77 : 459-479